

ものがたり

# 慈濟

ツーチー 2021年1月 289





證嚴法師はこう開示した。「私は今回の災難は大災難になると繰り返ししてきました。しかし、それは私たちへの大いなる教育なのです。再びこのような警鐘を鳴らす教育に出会った時、今以上に学ぶべきではないでしょうか」

二〇二〇年歳末祝福会のテーマ

大いなる教育は大衆を利す  
善行は世に平和をもたらす

敬虔に教えを学ぶ。

疫病による災難は人心への警鐘、

感染予防は心次第、

愛と善でもってこの世を平和にする。

● 表見返し 文・證嚴法師  
訳・済運 撮影・黄筱哲



慈濟日本サイト

# 目次

(二〇二〇年原稿執筆・翻訳)

【編集者の言葉】	環境保全について じっくり振り返って考えてみる	善耕／訳	4
----------	----------------------------	------	---

## 【主題報道】

慈濟環境保全の風が福建省に吹いた 物語は十四年前に遡る	心嫻／訳	8
漳州南靖から廃棄ガラスをなくす 善事には直ぐ駆けつける	心嫻／訳	10
美しい地球にする	葉美娥／訳	15
痛みをもともせず	有田夏子／訳	24
【世界に目を向ける】	有田夏子／訳	33
台湾・台南、フィリピン、アメリカ	明形 常樸／訳	44
	江愛寶	

## 表紙



回収資源をしっかり握りしめたその手は、リサイクル活動している時に傷ついても、作業を止めることはない。それは日々、大地のため、次世代のために奉仕している精神を物語っている。『疼惜』作者の黄筱哲さんは慈濟のリサイクルボランティアの日常を記録してきた。一枚一枚の写真は作品であるだけでなく、地域に根ざしたボランティアたちの無私の奉仕をする姿である。(本文P 70～81)

【国際慈善 マレーシア】	コロナ後の経営者の生き方	葉美娥、高雪白／訳	52
【證嚴法師のお論し】	生命に確かな価値があれば、 その法悦は余りあるようになります	慈願／訳	64
【大地の守護者】	環境保全の菩薩「ボランティア」に 心から感謝する	常樸／訳	70
【新書のすすめ】	推薦序文 物を大切する真理	善耕／訳	75
【動物と人間】	動物シエルトーで、里親が見つかるまで待つ	明滙／訳	82
【行脚の軌跡】	難関を乗り越えて	濟運／訳	100
十二月の出来事		濟運／訳	106

## 環境保全について じっくり振り返って考えてみる

「上人様、私たちと一緒に行きましょう。船に乗る前にライフジャケットを着用する必要があります。屏東の東港から小琉球までは約八海里（約十七キロメートル）ありますから…まもなく船が小琉球の波止場に着きますよ。上人様、ここにあるデッキをゆっくり歩いてください」。新型コロナウイルス感染症が蔓延する中、證嚴法師はクラウド上で、まだ行ったことのない離島の小琉球を含む各地のリサイクルステーションを行脚した。まるで現場にいるかのように、ボランティアは映像に従って法師を案内した。

慈済が環境保全で資源の回収に投入して三十年余り、大衆は「環境保全でリサイクルを行う」という概念に既に慣れていている。そして台湾は、外国メディアから環境保全リサイクル王国と称賛されるほどである。法師が「拍手する

手でリサイクル活動をしましょう」と呼びかけた当時は、経済が短期間に急成長し、消費も高度化したことで大量のゴミも生み出され、それらが環境を汚染し始めた時期だった。

現在はリサイクルが既に風潮として根付いたおかげで、環境は大幅に改善された。ただ、環境保全の領域の広さと深さにおいては、さらに多くの人々の参加と関心が待たれる。

今月号の主題報道には、二十四年前の台風九号（ハーブ）に関する物語が紹介されている。台湾で大きな被害をもたらした後、中国の福建省に上陸し、現地でも甚大な被害をもたらした時のことだ。慈済ボランティアは災害支援に赴き、その数年後には環境保全リサイクルという概念を広めた。当時の福建省閩南地区は、ほとんどの人が農業や漁業で生計を立てていて、回収した資源の価格は非常に低かったため、ガラス瓶や空き缶はしばしば廃棄されたままで、安全上の問題が懸念されていた。そこで、リサイクルボランティアは手袋をはめて、道沿いに資源を回収した。そして今では、廃棄ガラスを川



べりに捨てることをやめ、しかもボランティアが容易に回収できるようにコンクリート塀のそばに積み重ねておくようにしている工場も、いくつか出てきた。その後福建省の経済が発展していく中にあっても、慈済ボランティアは数々の困難を乗り越えて環境保全を堅持し、ついに一般の人々から広く認められるようになった。現在、福建省には百三十一カ所のリサイクル拠点があり、二〇一九年だけで回収した資源の総重量は三千七百トンに達した。多くの年配ボランティアもリサイクル活動を使命としており、彼らの老後の生活を豊かにしている。

環境問題への取り組み方は様々だが、最も基本的なことは、「使用を減らすこと」と「リサイクルによる再利用」であり、源から着手してこそ改善が可能となる。證嚴法師はいつも、リサイクルボランティアは両手を使って自然を守り、地球に対する真心のこもった愛を発揮していると称賛している。この根気よく物事を続ける精神は、世代から世代へと受け継がれるに値する。

リサイクルには全国民の投入が必要である。環境保全を広く展開するにあって、今まさに、より深い認識と行動が必要となっているのだ。というのは、環境問題の新たな局面、つまり目に見えない汚染が生命を脅かしているという問題の解決へと、挑戦する時期を迎えているからである。例えば、極端な気候変動によって引き起こされる危機が及ぶ範囲は、国と国との境を越えている。今年の七月、台北は百二十四年来の最高気温を記録した。それはエアコンによる電力消費量の急増によって大量の排気ガスが発生したことを物語っている。

新型コロナウイルス感染症予防対策のため、世界中ほとんどの都市が封鎖された。メディアは一度、その影響として多くの都市では大気汚染がなくなり、自然の清々しい情景が戻ったと報じた。それはまた、経済発展は環境破壊をもたらし、健康を危険にさらす代償を支払う必要があるが故に、どうバランスを取ればよいかを私たちに問いかけていることに他ならない。

これらのケースは、環境保全に関してじっくり考えてみることを促しているのだ。ライフスタイルの再選択において、儉約や素朴な生活に戻るためには、まだまだ努力する余地がある。(慈済月刊六四八期より二〇二〇年に翻訳)



一 主題報道

# 福建省に吹いた 慈済環境保全の風が

台湾に上陸した台風は、福建省に向かうことが多い。二十数年  
前の台風は、同時に慈済人を福建省へと手引きした。  
災害支援に始まり、次いで資源の回収が推進され、環境保全の流れが導かれた。現在、福建省には百三十一カ所のリサイクル拠点があり、年中無休で運営されている。



資料の提供・中国福建省慈済ボランティア（整理・編集部）  
訳・心榮



# 物語は十四年前に遡る

## 漳州南靖から廃棄ガラスをなくす

「私たちの町から至る所に捨てられたガラスがなくなり、人々の心が瑠璃のように清らかになることを願う」

十四年前、漳州市南靖のボランティアは廃棄ガラスの回収を始めた。大地から「廃棄ガラス瓶をなくす」という目標は、福建省での慈済環境保全の第一歩となった。

## 歴

史資料の統計データによると、台湾に上陸した台風の六十%が福建省に上陸している。慈済と福建省の縁は台風とも関係がある。一九九六年七月三十一日、台風九号が台湾に上陸したあ

とで福建省に向かい、双方に甚大な被害をもたらした。台湾の慈済ボランティアは台湾での緊急災害援助が一段落すると、福建省に駆けつけて被害状況を調査し、現地の台湾人企業家や現地ボランティア

たちと協力して慈済の慈善志業を展開し、その後、環境保全の流れをもたらした。

二〇〇六年末、漳州市南靖に在住する台湾人実業家でボランティアの廖朝仲（リヤオ・チャオジョン）さんは、現地の住民に慈済が実践している毎日の資源回収に関する話をした。そこから福建省での環境保全の歩みが始まった。ボランティアたちは、誰もやりたがらない大変なガラス瓶の回収を始めたのだ。十四年間続けた結果、総回収量は千トンをはるかに越えた。

ガラスは重く、割れた破片は危険だが、

●福建省漳州市南靖県のボランティアは、廃棄ガラスを拾い集めると、リサイクルステーションで色によって分別する。



回収価格は低く、基本的には採算がとれないため、至る所に廃棄ガラス瓶や割れガラスが散乱しているのをよく目にする。ボランティアは環境保全の理念を推進するため、診療所やホテル、屋台や金線蓮<sup>⑩</sup>を栽培する業者にガラス瓶の回収を呼びかけた結果、大方慈済の環境保全理念を理解してもらったことができた。決まった場所に集められるようになり、ボランティアが定期的に回収した。

⑩金線蓮：ラン科植物。ガラス瓶の中で栽培する。新鮮な金線蓮は生で食用でき、乾燥すれば、お茶にもなる。ビタミンやアミノ酸などが豊富でダイエットや美容にも用いられる。高級食材。

ボランティアの林團治（リン・トワンジー）さんは、十年以上に亘って数人の年配者と共に、毎週ガラスの回収拠点で作業を続けてきた。その一人は「地面にガラスの破片が落ちていると、自転車のタイヤがパンクしたり、歩行者に怪我をさせたりするので、外で遊んでいる子どもにとっても危険です。環境保全だけのためでなく、人々の安全のためにもガラス瓶や破片を拾って回収しなければなりません」と言った。これが慈悲の力である。

ボランティアの呉婉玲（ウー・ワンリン）さんは、最初はリサイクルの仕事に対して「不衛生で体裁が悪い」というイメージを持っていた。ある日、広場に

たくさんガラス瓶があるのを見かけ、拾おうとした時、知り合いが通りかかったため、拾うのをためらってしまった。

何度もそうしているうちにやっと、目を閉じ、歯を食いしばって、腰を曲げてガラス瓶を拾った。たん、胸がすっきりした。呉さんは感慨深げに、「ガラスの回収はとても大変な作業ですが、このようにして続けられれば、気力と勇気が湧きます。人目を気にせず、環境保全の仕事ですれば、謙虚になり、

傲慢さがなくなります」と言った。これが智慧の力である。

### 福建省の131カ所の慈済環境保全拠点



二〇〇六年八月、台風八号が、福建省北部の福鼎市に深刻な人的被害をもたらした。福鼎市のボランティアは、災害支援の傍ら犠牲者の家族を慰問した時、環境保全は時を置かずして推進しなければならぬことに気づき、二〇〇七年四月に慈済環境保全センターを立ち上げた。同年、アモイのボランティアもリサイクル活動を開始し、都心の地下駐車場にリサイクルステーションを設け、星空や街灯の下でも分別作業を行った。それぞれのリサイクルステーションはそれなりの厳しい状況下で活動を始めたが、今はすべて「地球を愛する」という決意を堅持し、広く民衆の支持を得ている。

泉州では二〇〇八年、ある家に設けられた回収拠点からリサイクルが始まった。今では泉州、晉江、石獅、南安の各地に五十八カ所以上の拠点があり、リサイクルステーションはリサイクルボランティアにとって、第二の家となっている。お年寄りたちは、環境保全の理念とそれを実践した後の喜びを閩南語の歌にし、短い劇を作って、より多くの人にリサイクル活動への参加を呼びかけている。十四年来、福建省にはすでに百三十一カ所のリサイクルステーションや拠点があり、二〇一九年だけでも年間の資源回収量は三千七百トンに達した。最も早く始まった拠点を訪れてみると、漳州のボ

ランティアは、今でも廃棄ガラスの回収作業を年中無休で続けていた。環境保全ボランティアの願いは「大地に廃棄ガラスが

なく、人心が瑠璃の如く清らかになる」とことである。(資料提供&撮影・陳建華)(慈済月刊六四八期より二〇二〇年に翻訳)

## 善事には直ぐ駆けつける

### 許亜通と陸阿宝の物語

◎文・陳莉菲 撮影・許雅玲(中国漳州慈済ボランティア) 訳・葉美娥

定年退職後の生活は、飲み食いや遊びに時間を費やすのではなく、毎日回収物と付き合っていく。台湾の八十、九十歳のリサイクルボランティアがまだ頑張っているのを目にすると、彼ら夫婦も疲れたなどと言わずに時間を把握している。





—— 九五八年生まれの陸阿宝（ルー・アバオ）さんは、七人兄弟の五番目で、小さい頃から兄弟たちの面倒を見てきた。皆それぞれに結婚した後も商売をしているので、人手が足りない時は自然に、氣立ての良い阿宝さんに手伝いに来てもらうそうだ。

当時、まだ仕事をしていた阿宝さんは体力に限界があったため、完璧にこなすことができず、手伝いに行くことができなかったことを兄弟に対して申し訳なく思ってしまったことがある。定年退職した後も相変わらず家族のために忙しかった彼女は、悩みがまた増えた。長期にわたる睡眠障害で体が弱り、遂に病に

倒れてしまった。長女の許雅玲（シュー・ヤーリン）さんは、心身ともに疲れ果てた母の様子を見て不憫に思い、今までと違う人生の道を歩んで欲しいと望んで、母を慈済に連れて行った。

しかし、「私は字が読めないのに、慈済で何ができるの？」と阿宝さんは新たな悩みを抱えた。その時大愛テレビの番組「草根菩提」で、台湾のリサイクルボランティアはたとえ高齢であっても毎日リサイクル活動をしているのを見て、彼女の悩みが消えた。「リサイクル活動に参加すると、地球を守りながら人助けもできるのね」と、彼女は彼らについていくことを決心した。

「以前、家内は気性がとてもせっかちで、悩みをいっぱい抱えていました。しかし、慈済に入ってから大きく変わりました。優しい性格になり、人に会うと笑顔で接しています。一体どの団体がこれほど素晴らしいか、短い期間に彼女を変えたのかと興味を持ち、見に行きました」。二〇一二年、阿宝さんの夫、許亞通（シュー・ヤートン）さんが初めて参加した慈済の活動は、回収物の分別だった。

● 8年来毎日、漳州市の市街地には、三輪車を漕いで地域ボランティアとリサイクル品を運んでいる許亞通さん（左）の姿がある。



「ボランティアたちがプライドを捨て、臭いも汚れも気にしない姿を見た時、私はとても感動しました」。亞通さんは直ちにその感動を行動に変え、阿宝さんに従って熱心にリサイクルの仕事をしようになった。そして、二〇一三年七月、近所の億禰新村に回収拠点ができ、資源の回収に誘われると、いつでも直ぐに駆けつけることとした。雨風の強い日も、寒い日も暑い日も一度も欠かしたことはない。

しかし、工作中に資源の回収に呼ばれた時はすぐには行けないので、そのことが彼を悩ませた。そこでリサイクル活動に専念するため、彼は仕事を辞めること

にした。『お金は多くても少ななくても、生活できればいいのです』と上人が言っています。私には決まった年金があるから、生活は保障されています。それ以来、リサイクル活動が夫婦の生活の全てになり、多くの人がそれに感動して参加するようになった。

### 人に感動を与えるほどの行動

「ギー」というブレーキの高い音が、渋滞の中で鳴り止まないクラクションの音と共に響いた。漳州市の市街地では毎日、三輪車を漕いであちこちから回収物を運ん

でいる亞通さんの姿を見かけない時はない。回収物が多い時、阿宝さんは電動バイクで亞通さんの三輪車の後ろについて行き、一緒に回収をする。住宅地、菜食食堂、商店街、工場でも、一旦呼ばれたら夫婦はすぐ駆けつけるようにしている。

二人は三輪車いっぱい回収物を持って帰り梱包した後、すぐ回収業者を持って行く。彼らは多くのボランティアを投入させただけでなく、回収業者の林宝金（リン・バオジン）さんをも感動させた。「彼らは資源を回収するだけでなく、助けを求めている人を助けることを心にかけています。そこに私は感動しました。

彼らが無私の奉仕を喜んでしているのを見て、あまり儲からなくても構わないので、私たちも少しでも奉仕しようと思いましたが」と林さんが言った。林さんは寄付金を出すだけでなく、最も良い値段で慈済の回収物を引き取っている。

普段は近所の人が回収物を持って来てくれるが、夫婦は地域のゴミ箱に捨てられた資源も拾って家のベランダに置いている。二人は毎朝、回収に出掛け、昼休みの後、家で回収物を仕分けしている。「ベランダのスペースは広くありませんが、常に整理していれば、生活に影響しません」と阿宝さんが言った。



## 菜食が最もよい実証

今年六十八歳の亞通さんは、今の環境保全の仕事は既に自分の本分であり、手に入ったのは喜びと健康だと言った。阿宝さんはペットボトルをつぶして袋に入れながら、「台湾のリサイクルボランティアは八十、九十歳になっても、私と同じ事をしているのです。それを考えれば、疲れを感じません」と笑顔を見せた。

慈済のことを次第に深く理解するようになった夫婦は、ボランティア養成講座に参加した。亞通さんは四十年近く嗜ん

できたタバコとお酒を止め、以前はあまり人と挨拶しなかったが、今は慈済の環境保全理念を広めようと、いつもコミュニティの人たちに笑顔で接するようになった。その親切で優しい様子は、多くの人を感動させ、リサイクルの日に合わせて家から回収物を持って来てくれるようになった。

環境保全に投入すると同時に、二人は菜食を始めた。十歳から一家のために調理を一手に引き受けて来た阿宝さんは、誰もが認める調理の腕前を持っており、山海珍味のフルコースの料理を出すのが好きだった。兄弟たちが褒めればほめる

ほど嬉しくなると、次回はもっと多めに作った。妹の陸宝玉（ルー・バオユエ）さんは、レストランの料理も姉さんの腕には及ばないと言う。「食事会ではいつも姉さんがエビやカニ、魚など、一度にたくさん買って料理し、夜明けまで食べたいこともありました」。

二〇一三年の九月、亞通さんと阿宝さん、そして娘の雅玲（ヤーリン）さんは、一緒に「心の故郷」と言われる花蓮の静思精舎を尋ね、ベジタリアンになる

●夫婦は毎朝、資源の回収に出掛け、昼に休憩した後、回収した物を仕分ける。これら回収物は近所の人が持って来たものもあり、ゴミ箱から回収したこともある。

ことを発願した。肉食料理が得意だった阿宝さんは、菜食する決意が崩れないよう、頻繁に菜食の店に通い、美味しい料理に出会おうと、家に帰って見よう見まねで作ってみた。熱心に食材を研究し、色や種類、栄養面も考えて上手に調整した。美味しく見て目が綺麗で、栄養もある菜食料理が作れるようになると、家族たちを招いて家で食事を開いた。

「私たちは菜食だとお腹がいっぱいにならないと思っていました、食べてみたら、とても美味しかったです。」と宝玉さんが言った。阿宝さんが得意な料理の腕前を発揮した結果、以前、魚や肉

るべきです」と言った。定年後の生活は、あちこち旅行して食べ回るのではなく、毎日リサイクルした物と付き合っている。例え体は疲れても、心は喜びに満ちている。それは夫婦が同じ願いを持っているからだ。「私たちもこんな歳ですから、環境保全をする時間は無駄にできません。環境保全を続けられ、もっと多くの人に認識を改めて参加してもらい、この団体をますます大きくしなければいけません」と言った。(慈済月刊六四八期より二〇二〇年に翻訳)

●陸阿宝さん(右2人目)は、機会があると親しい人を家に招いて菜食を振る舞っている。以前は魚や肉ばかり食べていた家族たちもだんだん菜食のあっさりした味を好むようになった。

料理が好きだった家族たちも、次第に菜食のあっさりした美味しさを好むようになった。彼女は漳州地域の慈済調理ボランティアの窓口となり、自分の技をボランティアたちに伝えている。

菜食して七年、家族が健康になっただけでなく、共に六十歳を過ぎた夫婦は、毎日出掛けて回収物を運んでリサイクルに励んでおり、体力は若い人に負けない。彼らは最も優秀な菜食の実証者である。

以前、感傷的だった阿宝さんは「慈済に来ると悩みが無くなるので、兄弟たちも賛成しています。小愛は守らなければなりません、大愛はもっと積極的に守



# 美しい地球にする

文・周健、朱艶艶（福鼎市慈濟ボランティア）  
訳・有田夏子

## 趙美球さんの物語

言ったことは必ずやり遂げる。趙美球さんは自分が環境保全のために生まれて来たのだと言った。「私の名前は『趙美球』ですから、この手で美しい地球にしたいのです」。

④中国語で「趙」の発音は「造」に似ている。

「苦難にある人はとても多く、證嚴法師はこんなにも慈悲深いのです。

法師こそ私が追隨すべき師であり、慈済は私が生涯かけて追求する道です」。涙を浮かべ、力強く語るたおやかな外見に似合わず、両手は、樹の皮のようにゴツ

ゴツとしている。

「二冬で、百枚ぐらいの絆創膏を使います」。長年、環境保全に携わってきた趙美球（ツアオ・メイチュウ）さんの手は、毎年冬にはひび割れを繰り返し、古傷に血がにじむ。

趙さんは毎朝三時に起床して顔を洗い、自転車に乗って慈済の福鼎連絡所へ出かける。真っ先に連絡所に着くと、慣れた手つきでパソコンを起動し、静思精舎の朝のお勤めにライブで参加して、「法の香りに浸る」開示を聞いたり、会務の報告をする。それが終わってから、家に帰って素早くご飯を食べて家事を済ませると、また連絡所へ戻る。そして、リサイクル品回収のために車を出したり、リサイクルステーションの整理をする。

家と連絡所を往復する毎日だが、疲れを感じることはない。連絡所はまるで別宅のようである。「私はいつも、慈済に来るのは修行のためだと思います。修行

する心で慈済に来てこそ、いつまでも変わらぬにいられます。仏法は止まることなく、終わりのないものです」。

### 人が集まれば力になる

趙さんは、まだ慈済についてよく知らなかった頃から毎日お経を誦み、香を薫き、仏様を拝んでいた。二〇〇四年に姉の趙美英さんから慈済に誘われた時、「自分には向いていないから寄付だけすると言いました。あの頃の私は道理を知らなかった。毎日他人と自分を比較ばかりしていました。他人が稼いで





いるのを見れば自分も稼ぎたいと思い、人が大きな家に住んでいるのを見れば、もっと大きな家に住みたいと考えていました」。

二〇〇五年、彼女は福鼎慈済中学校の親子サマーキャンプに参加し、また年末には福鼎市磻溪鎮で行われた慈済の冬季配付に参加した。「空がまだ暗いうちに出発したのですが、そこにはもう数千人の人々が待っていました。私は配付の位置につき、腰をかがめて、相

●中国福建省の福鼎市立病院で、慈済ボランティアが新規採用された医師や看護師、研修生のために人文講座を開いた。趙美球さん（右2人目）が、環境保全10カ条を解説した。（撮影・王鳳）

手に『感謝します』と言いながら両手を添えて物資を渡しました。とても寒い日で、道路は凍っていました。穴の開いたぼろぼろの靴を履いた人もいました」。

この光景を目の当たりにした彼女は、世界にはこれほど苦しい人々がいること、そして自分がどれほど幸せであるのかを初めて知った。「家族はやさしく、夫婦の収入も生活も安定しているのに、これ以上何を望むことがあるのでしょうか？」。

冬季配付を終えた彼女は、自分を変えて、この両手で苦難の人々を癒そうと決意した。平日は仕事があるため、週末を利用することにし、土曜日には王念蟬（ワン・ニエンツァン）師兄（スーシオン）

と共に病室慰問ボランティアをし、日曜日には慈済のボランティア室で当直を務めた。毎月の郊外への慈善訪問に必ず参加し、平日の夜の読書会には一日も欠かすことなく通った。「十数年来、私の初心は変わっていません。仕事の時以外は、慈済の活動に参加しています」。

二〇〇七年、楊徳釵（ヤン・ドゥツァイ）師姐（スージェ）の勧めにより、彼女はリサイクル活動を始めた。楊師姐は早朝五時過ぎから福鼎市立病院にある慈済のリサイクルセンターで回収に励んでいた。夏はとても蒸し暑く、回収された牛乳パックがひどく臭う時にも、それらを一つ一つハサミで切り開いてからきれ

いに洗うその姿に、趙美球さんは深く感銘を受けた。

「昼間は仕事があるので、夜に分別の仕事をしように考えました」。趙さんの呼びかけにより、福鼎連絡所では夜間のリサイクル活動が始まった。彼女はいつも一番早く到着し、一番遅く帰った。ステーションを掃除してから家に帰ると十二時近くなることもあったが、翌日にはお昼の休憩時間を利用して病院のリサイクルステーションへ行き、回収物を計量して回収業者の車に乗せた。会社に行く時間に近くなっても作業が終わらないこともあり、いつも大忙しだった。「あの頃は、涙も出ないほど大変でし

た」。辛いこともあったが、證嚴法師の望まれることをやり続けている。夜間のリサイクル活動に菩薩（ボランティアのこと）を募ったことで、仕事を持つ人々にも社会貢献のチャンスを与えた。

それ以来、福鼎連絡所のリサイクル活動で起こったすべての出来事は、彼女の目にしつかりと焼き付いている。リサイクルステーションの変遷や、それに携わった一人一人の努力や貢献は、彼女にとつてかけがえのない宝物なのだ。中でも特に思い出されるのは、二〇一二年六月、ある事情により、ステーションが幼稚園から現在の慈濟連絡所に引っ越すことになった。当時の慈濟連絡所は郊外に

あって、夜間の回収活動を行っていたが、夜九時以降はバスが走らない場所だった。電動スクーターを運転できない菩薩たちも多かったため、みんな夜間の回収活動はやめてしまうだろうと思っていた。ところが彼らは全員、早い時刻のバスに乗ってリサイクルセンターまでやってきて、夜九時までになるべく急いで仕事を片づけるようにしたのだ。また間に合わないときには、環境ボランティアの陳忠（チェン・ジョン）さんが慈済の車を運転して年老いた菩薩たちを一人一人家まで安全に送り届けてくれた。

●趙美球さんは仏門に入り、善行を始めて13年間、環境保全に力を尽くしてきた。（撮影・鄭爾婷）





人々の支持に励まされて、趙さんの願力はより強いものになった。彼女は「みんなが善いと言ってくれば、やり遂げる力が生まれます。みんなが善くないといえ、その力は生まれません。私がおこまでやってこられたのは、みなさんの力のおかげです。一人でできることには限りがあり、みんなで協力してこそ力が生まれるのだと実感しました」と語る。

### 慈悲の心で、蒼生を抱擁する

彼女の熱心な呼びかけにより、夜間に始まった福鼎連絡所のリサイクル活動は、昼間を含めて週四日になり、今では毎日に発

展している。ボランティアの数も日に日に増えていった。年老いた菩薩たちにとって、彼女は家族のように思われている。だから体調の悪い菩薩がいれば、親身になって具合を尋ね、電話をしたり、自宅を訪問したりして祝福を届けている。

彼女はまた、日々の生活においても環境保全の達人である。この十年間、洋服ダンスに入っているのは、いずれもリサイクルステーションで回収した服ばかりだ。水や電気を節約し、家ではエアコンをつけない。小さなタオルを湯おけの水に浸して顔を洗い、衣服も手洗いする。出かける時は、エコバッグを持っていないければ、絶対に何も買わない。全て、環

境保全を考えて行動している。

二〇〇八年に四川大地震が起きた時

食事のたびに子供たちのために祈り、ベジタリアンとなることを決意した。

は、慈済の災害支援活動に参加した。被災地である什邡市洛水鎮の学校では、位牌の一枚一枚に可愛い笑顔の写真が添えられていた。生命のはかなさと人生の無常を悟った彼女は、

●福鼎の慈済ボランティアたちは、夜間にリサイクル活動していたが、週4日から、今では毎日行っている。趙美球さんもこれに参加している。  
(撮影・劉幼眉)



彼女の夫は初めの頃、仏の道に熱心すぎるのではないかと言って、妻を笑っていた。だが二〇〇五年、妻と共に慈済の歳末祝福会に参加した時、彼は歌曲『蒼生を抱擁する』の歌詞にある「そつと歩こう、大地が痛がらないように」という一節を聞き、涙を流してこう言った。「證嚴法師は学校や病院を建てて、困った人がいれば助けに行く。これこそが社会の求める、真正正銘の善いことだね。仏法を生活の中で実践するとは、こういうことなんだ」。

それからは、彼女が慈済や仕事、家事で忙しくしていても、夫は文句を言わなくなつた。単に理解や思いやりを示してくれることもあれば、炊事や洗濯をしてくれることもあつた。娘も頼もしくなり、母親を心配させたりはしなくなった。家族の支持を得た彼女は心配が消えた。「慈済の因縁がすべてを導いてくれたのです。本当に不思議なことですね」と感謝の気持ちを抱きながらこう言った。

有言実行。趙美球さんは、大愛で大地を守る道を切り開き、一步一步着実に歩んでいる。彼女は自分が環境を守り、地球を守るために生まれてきたのだと言う。「違いますか？私の名前は『趙美球（造美球）』です。から、この手で美しい地球にしたいのです」。

（慈済月刊六四八期より二〇二〇年に翻訳）

# 痛みをもものともせず

## 陳月恋さんの物語

文・廖亜面（アモイ慈済ボランティア）  
撮影・范盛花（アモイ慈済ボランティア）  
訳・有田夏子

陳月恋さんは、一日に何度も出かけて資源回収に励む。定期回収のほかにも、呼ばればいつでも出かけていく。七十歳で、体重が三十五キロでも、彼女には本願と力量がある。回収物資がビルの何階にあらうと、どんなに多くても、蟻の引越しののように、少しずつリサイクルステーションまで運んでいく。

## 明

朝時代に築かれたアモイ城中村にある西潘社福元宮は、保生大帝と

媽祖が祭られており、六百年の歴史がある。慈済とも名を同じくするその「保生

慈済文化」の理念は、大道に大愛ありという精神を説くものであり、この地の人々に長きにわたって影響を与えてきた。

七十歳の陳月恋（チェン・ユエリエン）





さんは、若いころから福元宮の理事長を務め、もう四十年になる。毎朝、夫や家族の世話を済ませると、廟に行つて供物台を拭き、お香を立ててロウソクを灯し、お茶を供えてから国の安泰と民の平安を祈る。それが終わると、その日のリサイクル活動を始める。保生大帝の「懸壺濟世（医療で人命を救うこと）」と、慈濟の志「慈悲為懷（慈悲の心で

人に接すること）」は、いずれも同じく人々を守るものだと思われている。

### 麻雀をやめて、街に出る

二〇一五年、陳さんは、娘の呉芸娜（ウー・インナ）さんが慈済に参加してリサイクル活動を始めたことを知ると、麻雀も、宝くじを買うことも、街で買い物や食事にお金を費やすこともやめた。そして毎日の暮らしを楽しむようになって、なんだか顔のシミまで薄くなったような気がした。娘は母親に、今までの生活は「命を無駄にしていただけ」だと言った。娘のこのような変化によって、陳さん

は自分も一緒にアモイ慈済リサイクル教育センターを見に行きたくなった。そこで「リサイクル活動は環境をきれいにし、愛を捧げることができる」ことを知った。その日から自分も麻雀と宝くじ、広場のダンス、タバコをやめ、湖里区にある城中村の西潘社で資源の回収を始めた。そして祖先からの家を空けて、西潘社リサイクルステーションを設けた。その家は西潘社の曲がりくねった路地を入り、周囲をビルに囲まれた場所にある。建物の外壁は古く、石灰があちこちで剥がれ落ちていて、庭の片隅の花壇の側には、三種類に分別されたガラス瓶の袋が十幾つも積み重ねられてあった。一

袋あたり七〜八十キロもある。二つある小屋のうち、片方には洋服、靴、布団など雑多なもの、もう片方には瓶や缶、紙などが所狭しと置かれていた。これらの回収品は、近所から持ち込まれたものもあれば、彼女が足を運んで集めてきたものもある。

「ゴトン、ゴトン……」。彼女が歩くたびに、リヤカーが地面にぶつかる音が響く。路上のゴミ箱、市場、住宅地、学校、近所の家々をめぐる、朝から晩まで、雨風をものともせず、腰をかがめて回収していく。

彼女がリサイクル活動を始めた時、村では多くの陰口を叩かれた。賭け事で負

けてごみ拾いを始めたと言う人もいれば、乞食のような真似をして子供のメンツを潰していると言う人もいた。清掃員には「ごみばあさん」と罵られ、住宅の警備員には恥知らずと怒鳴られ、追い払われた。

だが彼女は気にすることもなく、堂々と答えた。「人を助け、地球を守る、とても意義ある行為です。盗んでいるわけでも、奪っているわけでもなく、恥ずかしいことなどありません」。

町中を歩いて回収を続け、環境保護を説き続けたところ、周囲の人々も少しずつ理解を示し、協力してくれるようになった。彼女は、日に何度も出かけて資

源回収に励み、定期回収のほかにも、呼ばればいつでも出かけていく。回収物がビルの何階にあっても、どんなに多くても、蟻の引越しのように少しずつ運んでいく。

ある時、古紙や古着などの回収品を取りに来てほしいと、ビルの六階に住む住人から電話を受けた彼女は、家事を中断し、リヤカーを引いて回収に向かった。階段を三往復したため、夜になって腰と脚が痛くなり、眠れなかった。

外出する時は回収袋、ガラ袋、手押し車を必ず持っていく。背中に背負った回収袋は、長年使い古して穴が開いている。

「もう五年も背負っていますから、慣れ

ました」。この袋には三つの秘密道具が入っている。「小刀と、縄と、ボランティアベストです」。「なぜベストを持っているのですか？」と聞くと、彼女は「理解できない人に嫌味を言われたら、これを着るか取り出して見せて、私が環境保護をして地球を守り、愛をささげていることを伝えるのです」と笑った。「今では警備員も私のしていることが善行だと理解してくれて、態度も優しくなりました」。

### 学校と焼鳥屋に通う

コロナウイルスの感染が蔓延する前、陳さんは毎週月〜金曜日の十二時半きつ



かりに湖里区にある民営の金山小学校に通っていたが、学校の警備員は彼女を見るとすぐに門を開けていた。「地元の人なら誰でも彼女の善行を知っていますよ」。

学校のごみ捨て場には四つのゴミ箱があり、生ごみ用が一つ、一般ごみ用が二つ、リサイクル用が一つとなっている。彼女はゴミ置き場に到着すると、すぐに腕カバーをつけてゴム手袋をはめ、リサイクル用のゴミ箱を運び出し、そこからペットボトル、飲料パック、下書き用紙、作業用紙などを回収していく。たとえ小

●陳月恋さんは、身体は細いが力持ちで、毎月50袋、多い時は100袋近いガラス瓶を回収する。

さな紙の切れ端でも、決して捨てることはしない。

彼女は回収しながらゴミ箱を傾け、最後には頭と体まで突っ込んで、回収できるものはすべて回収し、その場ですぐに分別する。終わるとゴミ箱をモップで拭いて元の場所に戻し、辺りを掃除してから学校を離れる。

警備員を務める遊善雲(ユウ・サンユン)さんは、「夏の暑い時、ごみは汚くて臭います。そこまでするのは、本当に容易なことではありませんよ」と感嘆した。

陳さんはリサイクルステーションに戻って回収物を下ろすと、休むことなく、

またリヤカーを引いて出ていく。路地裏の焼鳥屋で酒瓶を回収するのだ。「彼女は真面目で、夏には夜中の一時過ぎに来ることもあります。今の若い人には、そこまですることはできません。彼女の信念には頭が下がります」と焼鳥屋の店長が話してくれた。

また、彼女は酒瓶を一日二回、回収する。普段は夜の十一時頃に二度目の回収に出かけるが、店の前に置かれた酒瓶をガラ袋に入れていくと、一袋が三〜四十キロもの重さになる。昼間の疲れで、夕方からしばらく寝ると、一時まで寝過ぎしてしまうこともあるが、それでも回収





に出かける。いつも「大したことではないし、ほんの気持ちです」と言う彼女には、ボランティアたちも深く感心して賛嘆する。彼女が夜の外出を控えて昼間に回収するようになったのは、新型コロナウイルスが発生してからのことである。

### 母の歩んだ道を追いかけて

毎週水曜日、西潘社の環境デーになると、小屋の周辺はいつもよりにぎやかになり、中庭にはさまざまな種類の回収物資が山のように積み重ねられる。十数名のボランティアが半日がかりで分別、梱包し、それらを回収車に満載して数往復

すると、やっと仕事が無事に終わるということも多い。

「集美」という離島から来た七十歳過ぎのボランティアである紀麗金（チー・リージン）さんは、「この福田は大きく、分別しなければならぬ物資もたくさんあります。すべて月恋さんが、見返りを求めることなく、黙々と回収したものです」と言った。ボランティアの黄秀風さんは「月恋さんは、あんな細身でベジタリアンなのに、これほど力と願力があるのですから、私たちも怠けてはいられません。あの母娘は二人とも『頑張り屋さん』なんです」と、心底褒めたたえた。「母はテキパキとしていて、廟の掃除

から病気の父の世話までする他、家のことも全てきちんと片付けます」。行動する母親の背中を見ながら、子供たちはい

つの間にか影響を受け、自然に道理を学んだのだと娘さんは言う。

二〇一九年の春節の休みに、彼女は

娘さん夫婦と一緒に静思精舎に帰った。「慈済に入る前、テレビで證嚴法師を見

●西潘社のリサイクルステーションは、陳さんの自宅で、百年の歴史がある赤煉瓦造りの古民家であり、周りアパートに囲まれているが、ボランティアたちはここで回収物資を整理している。



た時、一目見てとても親しみ深い人だと感じました」。彼女は娘夫婦にこう言った、「證嚴法師のお話をよく聞いて、環境保全につとめ、地球を守る方向で行動し続けるのですよ」。

彼女は体が痩せていて、二〇二〇年に歯がすっかり抜け落ちて門歯一本だけになると、食事の量もさらに少なくなつたので、体重は三十五キロにも満たなくなつた。長年にわたる重労働のために腰を悪くし、骨が神経を圧迫し、静脈瘤が悪化してふくらはぎにはみみず腫れのよ  
うな青い血管が浮き出ている。「長く歩いたり、気候が変化した時や季節の変わり目には痛みます。まるで誰かに筋肉を

つかまれているようです」。

陳月恋さんの左脚には湿布がいっぱい貼られているが、笑いながらこう言った、「毎日痛みますが、気にしません。地面を力いっぱい踏みしめてリサイクル活動に出かければ、痛みは忘れます。慣れているから疲れを感じません」。

「母は痩せていますが、私よりも力持ちで歩くのも速いのです」と娘さんは誇らしげに言った。願う心が力を生む。西潘社のリサイクルステーションでは、一月に五十から百袋以上ものガラス瓶を回収している。

高いビルに囲まれた城中村の西潘社は、今年の九月に立ち退きを命じられた。将

来そこは運動公園として整備されるとい  
う。福元宮の隣に生い茂る背の高いガジュマルの木は、この廟と同じぐらい古い歴史を持つているが、この場所が取り壊されても、これら樹々と廟は近代的な公園に溶け込みながら、将来にわたつてこの地の人々を見守り続けることだろう。陳月恋さんは、老いてもなお衰えず憂えず、大愛の精神を広めながら、リサイクル活動に喜びを見出して行くだろう。子孫に浄土を残すために。（慈濟月刊六四八期より二〇二〇年に翻訳）

●毎週水曜日、西潘社の環境デーになると、庭が回収品で埋まり、小屋の周辺はいつもよりにぎやかなになる。ボランティアたちが一生懸命分別して、無事仕事を終えた。（撮影・呉芸娜）





# 台湾・台南



## 九二一大地震から二十一年 災害救助訓練は続く

文・洪淑真、吳秀玲、方玉葉、徐麗華、王美雅（台南慈濟ボランティア）  
訳・明形

各県と市の消防隊とレスキュー隊員が位置につき、医療救護隊員と軍隊の仲間も集合した。慈濟が開設した防災調整センターでは、ボランティアが力を合わせて仮設住宅を建て、移動式キッチンの準備を整えた。そして全方位対応災害救助車や移動浄水設備、水陸両用救助ボートも待機させた。

九二一大地震から二十一年目にあたるこの日、「国家防災日震災消防演習」が台南の奇美博物館駐車場で行われ、大規模な震災時の災害救助を想定した人

員の動員が行われた。慈濟は要請に応じて参加し、何年もかけて研究開発してきた災害救助用機材を展示した他、ボランティアたちは演習参加者にお昼の菜食弁当を提供した。多くの救助隊員が「食べ慣れた、ほっとする味」というこのお弁当こそが、長年、災害が起こるたびに被災地で提供してきた温かい食事である。







# フィリピン

資料提供・慈済フィリピン支部 撮影・ダニエル・ラザル 訳・常樸

## コロナ禍で交通が遮断された ジプニーの運転手たちが生活の道を模索する

フィリピンは一時期、新型コロナウイルスの感染者数が東南アジアで最も多かった国だ。八月から九月にかけて、感染者数が激増し、首都マニラと五つの人口密集地域では、八月から半月間、二度目のロックダウン措置が取られた。感染防止対策の規制の下で、公共交通機関が運行停止となり、街の主力交通である「ジプニー」の運転手たちは、この半年間、ほとんど収入がない。部分的なロックダウンが解除された後、交替制で営業が再開されたが、客はほとんどなく、運転手たちの生活は困窮状態に陥り、ひいては路頭で物乞いをする者まで現れた。



八月から、フィリピンの慈済ボランティアは、ジブニーやオート三輪の運転手たちに生活支援を開始し、三カ月間続けて物資の配付を行った。ルソン島から南のミンダナオ島まで、支援した都市や離島の貧困世帯の数は、十月上旬までに二万五千世帯を超えた。

「コロナ禍で、私たち多くのドライバーは途方に暮れ、どうやって家族を養えばいいのか、絶望していました。今日、配付を受け取った全ての家庭はとても喜んでいると思いますが」とジブニー運転手のベルナルド・マナランさんはコメを受け取ってから、マスクの奥から感動を言葉にした。



アンティポロ市



マリキナ市

毎回の配付は往々にして千人近くを対象にするため、ボランティアは、感染予防対策の規定を守りながら、困難を乗り越えて、配付者名簿を作成した。会場ではQRコードを使って本人確認をし、厳格にソーシャルディスタンスを取った。レストランの営業禁止が依然として続く中、野菜農家を支援するため、ボランティアたちは自腹で五千キロもの野菜を購入し、アンティポロ市で千人余りの運転手たちに配付した。それ以外にも一人あたり二十キロの米と食用油、酢、砂糖、麺類、石けんの他、茄子、ひょうたん、トウモロコシ、かぼちゃなどを配付した。物が多すぎて担ぎ切れないほどだったが、今月は家族にもひもじい思いをさせずにすむと皆、喜んだ。また農家も、やっと今季の農作物の収入を手にすることができた。



# アメリカ

文・アメリカ慈済ボランティア 訳・江愛寶

## 灰燼に帰した山にも愛はある

今年アメリカ西海岸に熱波が押し寄せ、八月に発生した森林火災が、カリフォルニア北部からネバダ州までの三万平方キロメートルを超える範囲を焼き尽くした。慈済ボランティアは、カリフォルニア州やノースカロライナ州等の緊急支援センターに赴いて、現地の救援機構と協力して拠点を設け、緊急支援に「購買用プリペイドカード」を贈った。焼け出されて緊急避難した人々は、これで暫く生活することができる。

北カリフォルニアの慈済ボランティアは、九月二十四日から北部複合火災地区にあるオーロビル市の配付会場に宿泊した。パトナムさん夫妻は、證嚴法師が森林火災で被災した住民にあてた見舞いの手紙を見て、思わず涙を流した。「慈済基

金会からの祝福を受け取り、人々の深い愛を感じました。私たちは日々をどう過ごしたらよいか分かりませんが、今は努力して一日一日をしっかりと過ごすだけです」と言っていました。夫妻にとって、これは初めての被災ではなかった。二年前パラダイスタウンに住んでいた時も、キャンプ・ファイアと名付けられた森林火災に遭遇した。「森林は休暇で訪れるにはよいのですが、もう居住には適していません」と言った。



撮影・劉翰脚



撮影・曾奕珣

## コロナ後の経営者の生き方

新型コロナウイルスの感染拡大を断ち切る為、マレーシア政府は今年三月から行動制限令を発令した。五月初めには一部を緩和したが、今年の年末まである程度の制限は続くことになっている。制限の影響が及ばない少数のフリーターは非常にラッキーである。それは失業者数が三月の六十一萬人から五月の八十二萬人に激増したからだ。彼らはどのように自力で生活しているのだろうか？

### コ

ロナ禍にあるマレーシアは、一九九七年のアジア通貨危機と二〇〇八年の大規模な経済衰退の時よりも深刻な状況に置かれている。ウイルスの感染拡大を断ち切る為、政府は三月

十八日から行動制限令（MCO）を発令した。医療・物流・食品・銀行などの生活に必要な産業界を除き、他の業種は全て営業停止となった。

多くの会社は無給休暇制度を実施し、

サラリーマンたちは収入を絶たれる問題に直面した。六月初めに発表された上半期の失業率は、昨年同期よりも四十二パーセント増加し、四十二パーセントの企業は正常な運営ができなくなったが、影響が最も深刻だったのはサービス業である。その後、条件付き活動制限令（R MCO）に変わり、各業種が徐々に営業を再開したことで下半期就業率は少し改善されるだろうが、人々は夜明け前の暗闇を如何に乗り切るかを真剣に考えなければならぬ。

王嘉苓（ワン・ジアリン）さんは、十一年間旅行会社を経営してきたが、今年一

月からコロナ禍の影響を受け、客先から旅行日程のキャンセルや変更が相次いだ。不安定な情勢を目の当たりにして、彼女は唯一の非正社員に暇を出した。三月に行動制限令が発令された当初、彼女は深く考えることなく、毎日のんびりと人気ドラマに夢中になって簡素な生活を送っていた。しかし、行動制限令が延長されると、彼女は慌てだした。オフィスの家賃は払い続けなければならない。コロナ禍がいつ収束するのか分からないし、収入が途絶えたら、半年後から払い始めるローンのお金は何処から工面すれば良いのか。



転職すると、  
早起きしなければならない

早朝四時半、朝ご飯を食べる余裕もなく、その日に販売するジャワ麺を用意するため、王さんの忙しい一日が台所から始まる。鍋から湯気が立ち上り、彼女の額から汗が滲み出た。今日、五十食分の出前を二カ所に届けなければならぬので、時間を無駄にできない。幸いなことに、最も頼りになるお母さんの陳淑季（チェン・シュージー）さんも起き出してきた。

「食材の下準備はできたの？」と尋ねながら、お母さんは三角巾をかぶって野

菜餅を揚げる準備をした。間もなく妹さんも参加して、ジャガイモのスライス、レタスの千切り、ゆで卵の半切り、干し豆腐の薄切り、シークワーサーのヘタ取りなどを手伝った。朝日が台所に差し込み、八時半から盛り付けを開始した。レタスともやしを横に並べ、ゆで上げたラーメンを入れ、ジャガイモ・干し豆腐・野菜餅・卵・シークワーサーを乗せ、少量のラー油をかけた後、砕いたピーナッツをトッピングすると、様々な食材の色が映え、綺麗に出来上がった。

「スープは最後に作るのですよ。でないとお客様が手にした時、全体が冷めて

しまっているから」と王さんは言いながら忙しく食材を並べていた。転職してから二カ月近くが経つと、彼女たちは秘訣を見出したため、調理する時間を短縮することができ、子供たちも台所の手伝いをしなくてもよくなったことを喜んだ。毎日午前十一時には一切の準備を終えた。週末はご主人が休みなので、彼女を載せて出前をして午後一時頃に販売を終了し、家路に就く。

ジャワ麺はインドネシアの伝統的なB

●行動制限令の下、多くの中小企業が資金繰りの問題に直面し、一部行き詰まった会社は倒産に追い込まれ、空き店舗として貸し出されている。（撮影・覃平福）



級グルメで、マレーシア人にも喜ばれている美食の一つである。彼女はいい加減に食材の準備をすることはなく、出前の日は一層早起きする。「以前はこれほど早起きする必要がありませんでした」と笑いながら言った。

### 良縁を結んで、菜食の推奨に尽力する

コロナ禍で王さんは旅行業界からの転職を余儀なくされたが、幸いにもご主人の仕事に影響はなく、家族の暮らしと私立高校で勉強している二人の子供の学費は心配ない。

●コロナ禍は旅行業界に深刻な影響をもたらし、王嘉蓉さんは十年間、経営して来た会社を休業して、転職せざるを得なかった。

(撮影・何維美)

何もしないと貯金を食いつぶす恐れがあるので、彼女は新聞の求職欄を閲覧したが、旅行業界で二十年余りの経験を積んでいても、異なった領域で仕事するのは大きなチャレンジであり、自信がなかった。旅行業界の知り合いから、フードコートで店を借りて食べ物売ろうと誘われたが、あれこれ考えた結果、それを断った。「今振りかえって見ると、何を心配していたのでしょうか？ やったことがなかったのです。どう始めていいのかわからなかったのです。でも行動に移さなければ、何の結果も得られないのです」と彼女が言った。

以前、自分の家でコーヒー・ショップを経営していたことを思い出し、母と妹に相談して、自分の家で調理して出前することを始め、SNSを利用して受注した結果、良い反響が得られた。そこそこの収入があるだけでなく、菜食を広めることもできるのだ。

クラン区の客は二食分、そして、他の地域なら四食分注文があれば、無料で配達する。「よその店の売値はもっと高いことは知っていますが、この仕事はお金を稼ぐだけでやっているのではありません。菜食を食べてくれる人がいれば、喜んで販売したいのです。皆が喜んで菜



食を食べてくれれば、證嚴法師に代わって菜食を広めていることになりまし」と彼女が言った。

彼女は率直に、出前商売は以前の収入の三分の一しかなく、しかも家族たちの助けがあつて成り立っているのだと言う。しかし、家族たちは「社会から得て、社会に返す」という精神を持っているため、一食当たり六リンギット（約百五十円）の売値から、五十セント（約十三円）を慈済の慈善事業に寄付すると決めた。十年前に慈済ボランティアになった陳さんは、「私たちは僅かでも収入があるので、人を助けることができます。

善のさざ波が自分たちの身に返ってくると思つていきます」と娘を大いに応援している。

### 機会を求め

### 山は動かないので方向転換する

七月、感染拡大がコントロールされ、学校が授業を再開すると、社会でも各業種が逐次再開となった。しかし、まだ入境制限は解除されていないので、旅行業界は依然として低迷状態を極め、彼女はオフィスの賃貸契約をキャンセルし、後の事は改めて考えることにした。



同じくコロナ禍の打撃を受けた中に娯楽業界がある。慈済ボランティアの何永康（コー・ヨンカン）さんは、長年カラ

オケ店を安定して経営してきたが、制限令の実施後、三軒が閉店に追い込まれた。半世紀を生きてきた彼は初めて先が見えないと感じたが、

このまま意気消沈してはいけないと自分に言い聞かせた。

七月から、何

●王嘉苓さん一家は早起きして、食材の下準備と出前の用意をする。収入を得るだけでなく、新たな菜食を開発して、菜食を勧めている。

（撮影・覃平福）





さんは奥さんと一緒にネット上でフラワーショップを開いた。商売をやりながら勉強を重ねることも厭わなかった。「これは神様から与えられた試練なのかもしれない、たとえ困難に出会ってもそれは成長の過程なのです。自分の考え方や方法を変えれば、道を進み続けることができます」と何さんが言った。

慈濟人文真善美（記録部門）の撮影ボランティアをしている何さんは、この期間、以前と比べて取材に出かける機会が増えている。「毎日商売はどうなるかと考えていたら、眠れないでしょう。制

●鄭智源さんは、善行で良縁が結ばれる故に人脈も広がると信じている。今までのドライバーの仕事も悪くなかったが、行動制限令で収入に影響が出た。しかし、慈善をするにはちょうど良いタイミングであると言う。（写真提供・鄭智源）

限令が出ている間は解決方法がありませんから。どうせ何もできないのなら、慈濟が難民や外国人労働者に配付しているところを撮影しようと思いましたが。彼ら難民や外国人労働者に比べたら、自分はとてもラッキーですよ」と言った。

難民や外国人労働者の収入は日給制なので、行動制限令で工場が止まっている間は直ちに食糧不足に陥ってしまう。家賃が払えなくなると、家主から追い出され、目を赤くしてボランティアに助けを求めて来た人を目の当たりにした何さんは、深く感じるところがあった。

難民への配付活動のために電話訪問を

しているボランティアの謝小慧（シエ・シャオフイ）さんは、四月の時点では収入がなかったが、その後、幸いにも新しい仕事が見つかった。「給料は前より少ないですが、家で何もしないよりはいいと思います」。慈善の仕事で彼女は足ることを知った。貯金を取り崩して生活しているが、家族の一日三食を賄えるので生活が苦しいとまでは言わない。「本当に感謝しています」と彼女が言った。

この期間に慈濟慈善配付活動に積極的に参加したのは、タクシードライバーの鄭智源（ジョン・ジューエン）さんである。以前は主に空港への送迎をしていた

が、コロナ禍で数カ月間収入がなくなっ  
てからは、政府からの生活補助金で家  
族の生活を賄っている。「このチャンス  
に、広く人と良縁を結び、身をもって子

供の模範になるつもりです。どんな時  
でも、人助けに全力を尽くすべきです」  
と彼は言った。(慈済月刊六四七期より  
二〇二〇年に翻訳)

## 互いに関心を持って助け合い、 コロナ禍で困窮した人を支援する

◎資料整理・編集部 訳・高雪白

新型コロナウイルスによる感染症が爆発的に広がってから、慈済マレーシアのセラングール支部は、直ちに第一線の医療関係者と貧困者に支援の手を差し伸べた。病院やクリニック、警察、学校等二千を超える機関を含む、二万八千世帯余りに寄り添って支援を行った。

様々な業種は仕事を再開したが、多くの人は未だ困窮に陥ったままだ。支部では七月から「互いに関心を持って助け合い、困難を支援する」活動を繰り広げた。支援の申し込みは四千三百件以上に上った。一万人余りのボランティアを動員して家庭訪問を行い、生活困窮家庭三千世帯に連続三カ月わたって生活補助金を支給した。

インターネットが使えなかったり情報が届かない家庭を考慮して、ボランティアたちは積極的にその支援プランを宣伝すると共に、クラン連絡所のボランティアは住宅街にサービステーションを開設して申請の手助けをした。申請者の中には高齢や病気で仕事ができず生活に困っている人やコロナ禍で生活が困窮し、わずかな収入に頼って暮らしている人もいた。現実の危機に向き合う時、地域の人々が力を合わせてこそ困難を乗り越えることができる。ボランティアは竹筒貯金や菜食チャリティーバザー等で募金を呼びかけ、少しでも多くの人を助けようとしている。(慈済月刊六四七期より二〇二〇年に翻訳)



●ボランティアは7月中旬からMRTタマン・ムテイアラ駅周辺でコロナ禍に関する救済計画を説明し、人々に善の心で共に布施することを呼びかけた。(撮影・林振勝)



【證嚴法師のお諭し】

◎ 訳・慈願 絵・陳九熹

生命に確かな価値があれば、  
その法悦は余りあるようになります

この世で最も価値があるのは生命です。

時を逃さず奉仕すれば、人生はもっと価値のあるものになります。

日々、余りある法悦の中で過ごすことが、

最も智慧に溢れた、最高の人生なのです。

時

が過ぎるのは早いもので、一年

一度の歳末祝福会が既に十一月

から始まりました。皆さんは福慧お年

玉を手し、その喜びを持ち帰り、年越

しの準備をすることでしょう。新年に

は新しい希望を抱き、毎朝、その日が

楽しい一日になることを願うように、

毎日、毎月、毎年が平穩無事であるよ



う願わない人はいません。

行脚で台北に着き、ベテラン委員たちに会うと、以前年末に、彼女たちの案内の下に貧困家庭の重複調査に出かけたことを思い出します。三十数年前、三芝を訪問した時、百歳の一人暮らしで目の不自由なお年寄りが、ボロボロの茅葺き屋根の小屋に住んでいました。外でしゃがんで火をおこしているのを見て、とても心配になりました。慈済委員は普段から代わる代わる訪ねて、風呂の世話や家の掃除、生活必需品の備えなど、亡くなるまで長年、世話をしました。半世紀も前から慈済ボラン

外出禁止令などが続いており、多くの人が無給になったり、操業停止などによって、影響が各層に広まっています。

世界で「マスクが買えない」状態になっていますが、世界の国々にいる慈済人に感謝します。防疫物資は慈済の医療機関になくはなりません、その他の医療や慈善組織でも同じく必要であることを予測しました。人々が平穩になって初めて社会が平和になるのです。彼らは勇敢に至る所でそれを買って提供しました。善人が多ければ、善いことも多くなり、愛に余力が生まれるのです。

ティアは、今で言う「長期ケア」を自発的に行ってお年寄りを自分の親のように労り、最期まで世話を続けていたのです。

貧困、障害、老い、病、孤独など、慈善訪問によって体得したことは、仏陀が言われた「苦諦（くたい）」そのものを証明しています。人生に苦しみがあり、この世にはそれ以上に多くの苦難があります。今年はまだ終わっていませんが、世界各地で多くの天災、人禍が起きていると共に、新型コロナウイルスの感染症は今でも感染症例が減るどころか増え続けています。感染予防のために国境封鎖や市街地封鎖、

世の人が慈済のために尽くしてく

れ、慈済は世の人々のために少しも出し惜しみをしません。これが共存と愛です。慈済ボランティアは慈悲濟世の心をもっています。慈とは縁のない人にも恵みと幸せを施し、悲は人の身になって悲しむことです。この非常時にあって、誰もが互いに労わり、共存していかなければなりません。人々の愛に寄りそって、苦難の人には労わりの心で奉仕し、少しでも多く救済物資が苦難の場に届くよう尽力することです。防疫の規定で私たちはその場に行くことはできませんが、敬虔な心をもって

人々に愛の心と呼び掛け、善行して福を作り、その福を結集させるのです。

五十五年前に一つの固い信念のもとに、三十人が毎日五十銭を節約して慈善を始めました。台湾で始まり、今では世界六十三の国と地域に慈済人がいます。彼らは近隣の国に災難が発生すると、現地で救済物資を調達して支援に駆けつけます。もし当初の「五十銭」がなかったら、今の慈済はなかったでしょう。長期ケアや緊急支援を含む慈済の人道支援の足跡は既に百十カ国以上に及んでいます。

人や物、あらゆる生命への愛です。人の手は万能で、何千、何万キロもの回収物がリサイクルボランティアの手で運ばれ、分別されています。最も美しい手は、どれほど多くの善い事をしてきたことでしょう。五百人が一緒に衆生に慈悲を奉仕することは、即ち一体の千手観音菩薩なのです。一つの手が動けば、千の手、万の手が動き、私が成し遂げようとしていることを手伝ってくれています。

この世で最も価値のあるものは生命ですが、その生命をもっと価値のある

私は心から感謝しています。こんなにも多くの人が私と一緒に善行に取りくんでいることを、心から幸せに感じています。行脚で台北市東区の集会所に来た時、「上人、愛しています」という皆の声を聞いて、私が振り返って答えようとすると、「上人の愛するものは全て愛しています！」と私の気持ちに代わって言ってくれたのです。皆が私の心を知ってくれていることに感謝しています。私たちの同じ方向とは即ち愛です。

人々の心の中には愛があり、それはものにしなければなりません。慈済人が、「志業を続け、健康で、最後の息まで続ける」と発願するのを聞くといつも、これが最高の智慧であり、最も素晴らしい人生だという思いを確かにします。奉仕はお金にはならなくても、喜びと生命の価値が得られます。毎日余りある法悦の中に浸ることができのです。生命の方向が正しければ、心して精進することです。一秒一秒の心が軌道から外れないように地に足を着け、悔いのない人生を送りましょう。(慈済月刊六四九期より二〇二〇年に翻訳)

# 環境保全の菩薩「ボランティア」に 心から感謝する

二〇一三年の『慈濟月刊』に掲載されていた「大地の保母」というコラムには、リサイクルボランティアの奉仕の記録があった。環境保全を推進してから三十年になるが、私は新たに全てのストーリーを回顧した。映像と文字を通して見ていると、全てのリサイクルボランティアたちに再び出会ったような気がした。彼らの見返りを求めない奉仕の姿に湧き上がった感動は、忘れることができない。このボランティアたちのことを、私自身の働きをもって記録することが、彼らに対して私ができる最大の感謝の表現である。もし縁があれば引き続き、リサイクルボランティアたちがどれほどこの大地を大切にしているかを伝えていくことが、功德を成就させることになるだろう。

—— 文・撮影 黄筱哲 訳・常樸



リサイクルボランティアの手、2016



## リサイクルボランティアと 食事を共にする

リサイクルボランティアの姿を記録して以来、私は彼らの生活が極めてシンプルであることに気がついた。特にお年寄りや修行者のように睡眠時間を削って勤勉にボランティアをし、質素な食生活を送っている。

ある時、七十歳ぐらいのリサイクルボランティアを撮影していたが、その時のことは深く印象に残っている。丁度夕食時で、不測の客の私をもてなすために、冷蔵庫の中に保存していた数枚のベジタリアンステーキを食卓に並べてくれた。食事する前、彼女は恥ずかしそうに、「これでは足りませんね。実は、昨日茹でたお椀一杯のトウモロコシがあるのですが、出す勇気がありません。もしそれでもよかったら、召し上がりませんか。温



リサイクルボランティアの食事

め直しましたから」と言った。私は笑いながら、「それも喜んでいただきます！」と答えた。食事中、お年寄りを喜ばせるために、私は全てのおかずをおいしそうに食べた。一気にご飯を二杯食べてから、三杯目を盛り付け用とした時、炊飯器のご飯が底をついていることに気付く、私は茶碗に半分だけ盛りつけた。私たちは食べながら世間話をしたが、このお年寄りはいつもおかず一品とご飯で食事を済ませ、スープとおかずは一度に二日分を作っているようだ。食事の時はスープをご飯にかけ、短い時間に食事を済ませ、貴重な時間と精神を無報酬のリサイクル活動に投入していた。

その日、お年寄りが食卓に座る前に、私は食卓の上にあるあまり大きくないお碗のご飯を撮影した。これがお年寄りのお腹がいっぱいになる毎度の食事の量であり、毎日の体力の源でもある。

(二〇一九年四月一二日に執筆、二〇二〇年に翻訳)

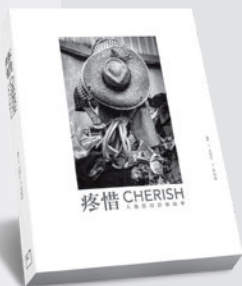
新書のすすめ・『大切にする―大地の母を労る映像による物語』

推薦序文

## 物を大切する真理

◎文・阮義忠 訳・善耕

『疼惜』  
作者・黄筱哲、蔡瑜璇  
カスタマーサービス：02-28989991  
静思書軒、主要書店、またはオンライン書店での購読をお待ちしております。



## 初

めて黄筱哲（ホワン・シャオジョー）さんに会ったのは約七、八年前、自分の体験談を分かち合うために台南静思堂に行った時のことである。高速鉄道の駅まで二人の師兄（スーシオン）が私を迎えに来てくれた。色黒で細身の、写真を撮るのが好きだと恥ずかしそうに言ったその人は、僅か三十分間のドライブの間に、どうすれば撮影の能力を向上させること

ができるか、と何度も私に質問した。彼は見たものを記録するだけでなく、心の感動をより力強く伝えたいと言った。

「それなら本を何冊か読むことですね」と私は笑顔で彼に提案した。そして「私が初期に書いた数冊の本を読んでみませんか。世界的な写真撮影の巨匠の紹介や撮影の美学についても触れています。ただ、多くは絶版になっているので、見つけるのは難しいと思いますが……」。

数カ月後に再び彼にあった時、図らずも彼はそれらの本が全部見つかったと私に言った。「私は古本のオークションサイトでそれを購入しました。今は値段が上がってとても高くなっていますから」。

この出来事は私に深い印象を与えた。黄さんは、作品を賞賛されることだけに関心がある多くの写真愛好家と違って、自分の内面を磨くことと、直ちに行動に移すことを知っている。今の携帯電話やデジタルカメラは機能がより充実し、撮影にほとんど技術を必要とせず、誰もが写真を撮るのとは

でも簡単なことだと思われるが、そういうわけではない。撮影の根本は物の見方にある。果たしてカメラを持った人は何を見ているのか？ 物事の外見だけを見ているのか、それとも対象物の存在意義を見ているのか？ 同じように見ているでも、中身がない人はそれを体得することはできない。

当時、私は随行員の一人だったが、證嚴法師と一緒に台南に来るといつも、群衆の中に黄さんを見つけ、互いに遠くから会釈した。私は二〇一三年に法師に暇を告げてから、台湾と中国の間を行き来し始め、本の出版、講義、講演に専念した。二〇一四年の夏、私は台北の北投に撮影ワークショップを開いた。黄さんはある慈済の師姐（スージー）と共に撮影講座に申し込み、毎週台南から通ってきた。その師姐は名前を蔡瑜璇（ツァイ・ユーシュエン）といい、後に二人は果たして夫婦になり、仏道を共に学んでいる。四回の週末の延べ八日間の交流で、黄さんの志向と抱負を理解した。彼は私に、カメラを通して慈済のリサイクルボランティアを記録する



つもりだと言った。

その後、『慈濟月刊』を受け取る度に、直ぐに黄さんと蔡さんのコラムを探し、彼ら二人が一路手を取り合って菩薩道を歩み、休まず精進してきたのを見守りながら、とても嬉しく思っている。

一九九九年から二〇一三年まで、私は證嚴法師のお供で台湾各地の慈濟支部に行き、数え切れないほどのリサイクルステーションを訪れた。そこで見た苦勞と汚れを厭わないボランティア精神と意志の力に、何度も感動してきた。回収物の山に埋もれていた彼らは、各地から来た異なる階層の老若男女で、四、五才から九十才余りまで年齢は様々である。

リサイクルボランティアたちは雨のような汗を流しても、いつも笑顔で嫌な顔をする事もなく、回収された段ボール箱や金属類、ボトル、缶を一つ一つ分別している。彼らは法師の教え通り、「ごみを黄金に変え、黄金を愛に変え、愛を清流にして世界を駆け巡る」奉仕を貫き通している。證

嚴法師を見上げたその顔は、鏡のように、彼らの確固たる信念と自由自在な人生をはつきりと映し出していた。

正直なところ、私もかつて地道にリサイクルボランティアの記録を取り、心を込めてその輝くような容貌を撮りたかったのだが、縁がなく、やむなく諦めたことがある。しかし、黄さんと蔡さんはずっとそれを行ってきた。それだけでなく、その領域は非常に広くて内容がとても素晴らしく、誰もが敬服するものである。私が嬉しく思うのは、彼らの努力がようやく本になって出版されたことである。題名を『疼惜（大切にすること）』といい、慈濟が環境保全で三十周年を迎えた今年の八月に上梓したのだ。

地球にとって、人類の存在は負担である。いわゆる開発と建設はその実、資源を消耗し、生態系を破壊しているのである。賢者の言葉に「人類が生存のためだけに必要とするならば、地球は無尽蔵の宝物でしょう。しかし、暴利を貪るのなら、何時の日か地球はあらゆる生命の墓場になるでしょう」

とある。慈済リサイクルボランティアはあらゆる努力をして、できるだけ物の寿命を延ばし、資源をリサイクルして再利用しているのである。彼らは自分自身のためだけでなく、地球上のあらゆる人とその子孫のためにボランティアをしているのだ。

リサイクルボランティアの写真撮ることは挑戦であり、難易度は低くない。というのも、作業環境は殆どが雑然としていて、それに同じような内容の作業を反復的しているからである。とはいえ記録や撮影する者にとっては、表現上の課題に遭遇することがよくある。しかし、黄さんと蔡さんは長年にわたって、たゆまず困難を克服してきただけでなく、素晴らしい作品を作り続けてきた。彼らは冷淡な態度で傍観して報道するのではなく、共感を抱いてリサイクルボランティアの苦勞を体得し、敬慕の念を持ってカメラと言葉を通して人間菩薩たちに敬意を表しているのである。

『疼惜』は編集と題材の選択にも成功した素晴らしい作品だ。二十数人のリサイクルボランティアに関する簡単な描写は、簡潔な文章で力強く、写真も十分にそれを表現しており、特に後書きは私を感動させた。黄さんが撮った写真が六年後の月刊誌『慈済』に掲載されて間もなく、リサイクルボランティアの陳蕭繡蕉（チェン・シャオシウジアオ）お婆さんはこの世を去った。家族は告別式でお婆さんのはにかんだ写真を掲げ、親戚や友人たちは彼女の最も美しい一面を脳裏に刻んだ。

それは私に、本に出てきた他のリサイクルボランティアや、この本の著者、そして全ての読者もいつかはこの世を去るのだという事を気づかせてくれた。人類が生存の拠り所としている地球も、私たちの無知と無駄使いにより寿命が縮む危機に瀕している。しかし、いずれにせよ、長年にわたるリサイクルボランティアの貢献の一つ一つは、地球破壊のスピードを少しでも遅らせているのである。正に彼らの無私の奉仕が、人々に物を大切にする心の真義を教えている。（慈済月刊六四五期より二〇二〇年に翻訳）



# 動物シェルターで

## 里親が見つかるまで待つ

人が近づいて来る気配を察知した。足音が微かな物音が聞こえたのかもしれない。前足を扉に掛け、耳たぶを収め、鼻頭を三角の穴から突き出した。

新北市三芝区にある「動物の家」は、放浪動物の収容に加えて、教育を通じて、正しい動物保護の概念を伝えることで、放浪動物に希望のある未来が来ることを望んでいる。





撮影・安培博（経典雑誌撮影部主任）  
文・李娉婷  
訳・李曉萍（明浩）

## 桃

園市にある動物保護教育パークは、建物の外にある堤防の後ろに台湾海峡が位置しているが、飼育している犬の数が多いため、空气中に少し異臭が漂っており、それが潮風の匂いよりも強い。しかし、潮風はそこが辺鄙な場所だということを気づかせてくれる。冬になると、ここを訪れる人は数えるほどしかない。偶にわざわざ来てくれる人の理由を聞くとかなり失望させられる。

一人のおじさんと一匹の斑点模様の犬

## 飼いたくない理由は……

動物保護教育パークという名称が付いているが、現段階では、スタッフは一般市民を教育するよりも、犬猫の收容手続きをするだけで手一杯なため、人々はそこを「新屋シェルター」と呼んでいる。犬を散歩させるボランティアグループの敦（トン）さんは無気力にこう言った、「明らかに、殆どの場合はペットを手放したという飼い主の考え方自体に問題があるのですが、週末だけ奉仕に来るボランティアとしては、犬を連れて来ないでほしいという訳にもいかず、週一日でも飼い主に見捨てられた犬に温かさを与え、

が、二週間前と同じ位置に立っていたが、状況は全く異なっていた。前回、ボランティアはその人が二匹目の犬を飼ってくれることに非常に感謝した。しかし思いも寄らず、今回、彼はその犬に向かつて、「言うことを聞かないから、こんな目に遭うのだ！」と声を荒げた。事情を聞くと、おじさんは犬と散歩する時、いつもロープをつけない。しかし、その犬がバイクに乗っていた人を転倒させたため、賠償金を払わされた。それで、彼はもうその犬を飼うつもりはなく、「大人しくしない」というなることを見せつけるために、もう一匹の犬も連れてきたのである。

散歩させたりして過ごしているのです」。

道端にペットを直接捨てる違法行為とは異なって、シェルターで手続きをして飼育を放棄するのは合法である（公式の名称は、「引き続き飼育しない」である）。元々この制度は飼育が困難になった飼い主のために作られたものだが、今は飼い主の責任感が低い台湾で乱用されている。見捨てられたペットでシェルターの運営が行き詰まらないように、地方自治体は動物を預ける時の条件を引き上げており、今では多くのシェルターは「新たな飼い主を探す期間」という条件を付けている。もし、飼い主が続けて飼育したくないというのであ



れば、先ず、申請してペットを手放すという公告期間を経た後、初めて送られて来ることができるようになっている。全台湾でその「待ち期間」が最も長いのが台中の六十日である。

「飼育放棄の理由はまちまちで、引越しや離婚、犬に対するアレルギー、吠え過ぎる、吠えない、トイレのしつけが出来ていない、病気などです。飼育したい時は絶対に責任を持って飼うと保証するのですが、事情が異なってくると責任を回避しようとしています」。台中市動物保護局動物收容科の洪惠雅（ホン・フイヤー）科長によると、飼育放棄の理由が動物の行動にある場合、スタッフは飼い主に対応方法



●「動物の家」南屯パークの張美仙主任（左）とジーク動物シェルターの創設者（右下）及びボランティア（右上）は皆、見捨てられた動物のケアと收容の問題に尽力している。



を教え、公告期間の六十日の間に再度試してみよう勧める。そういうタイプの飼い主は動物に対する愛情を持っており、

どうすればいいのかわからないだけで、教えた方法を試してみると再び来ることはない。だが、そういうのは少数である。

洪さんによると、シェルターにいる犬のうち、外部環境の変化に適応できるのは三分の一だけで、殆どの犬は適応できず、閉じ込められたことのない犬は吠えず、檻を叩いて出ようとす。また多くの臆病な小型犬で、他の犬が絶えず吠えているという慣れない環境に置かれたことから、大きな心理的プレッシャーに陥ってしまった例もある。

台湾のシェルターはどこに向うべきか？

猫がシェルターに送られてくると、最初は絶食することがよくある。飼い主に可愛がられて太った猫は最も問題が生じやすく、一日でも絶食すると致命的になりうる。太った猫は絶食すると肝機能が衰え、そういう状況になった場合、シェルター側は猫に点滴をしたり、猫に服や箱をかぶせてストレスを軽減させる。そもそも猫に焦燥感をあたえないようにするには、もう期待できない「帰宅」をさせるしかないでしょう。

台湾の公立シェルターから猫や犬を引

き取りたい場合、二十歳以上で、途中で捨てた悪い記録がなければ、あとはスタッフの判断に任せることができる。現在、新北市と新竹市のみが引き取り手続きを終える前に、飼い主の責任教育コースを受ける必要があるが、一回のコースで役に立つのだろうか？もし本当に具体的な基準を設置するなら、どんな基準が合理的且つ厳格と言えるのだろうか？

多くの愛犬家が懂れるドイツを例にとると、野良犬が全く見られないので、シェルターでは殺処分がない。犬を飼う条件は、多くの国にとっては手が届かないが、その基準は、社会制度に頼るだけでなく、国民の意識によって成り立って

いる。実際、台湾の規定の中には、ドイツに当てはめると厳しすぎるものもある。例えば、一度でも飼育を放棄したことがあれば、永遠に飼育することができないという罰則は、ドイツ人にとって非常に驚くべきことである。というのも、ドイツ人はどうしようもない状況下でもペットの飼育を放棄することがないため、それは将来、飼育可能になった時に、彼らが良い飼い主にならないことを意味しているとは限らないからだ。

マリアは十歳の時に両親とドイツに移住し、既に四十年以上住んでいる。彼女は、一九八四年という早い時期に、台湾からドイツに野良犬を送って飼育しても



らっていた。今、彼女はより積極的に台湾のボランティアと協力して、ドイツで野良犬の引き取り先を探している。マリアによると、ドイツでは飼育する犬にチップの埋め込みを強要はしないが、毎年八十から百五十ユーロほどの「犬税」を払う必要がある。大都市の方が税金は高く、全ての犬に納税済みプレートを着ける義務があり、着けていない場合、警察はその場で百五十〜二百ユーロの罰金を課すことができ、飼い主に直ぐ納めるよう要求する。

ドイツの公立シェルターから犬を貰い受けた場合は、約二週間待つ必要があるが、申請後、シェルターからボランティア

依然として大量の遺棄問題が多いことである。動物愛護団体「Best Friends Animal Society」の統計によると、一九八四年は一年間で千七百万匹の猫と犬が殺処分され、二〇一六年には二百万匹、二〇一八年には七十二・三万匹が殺されている。数字で見ると少なくとも、明確な改善は将来、収容所で殺処分がゼロになる希望を見せてくれている。また、シェルターの引き取り規定は「基準を引き下げる」方向に向かっている。

台中市動物保護所のスタッフが

●新北市三芝区の「猫ゆりかご」は、猫が適応できる三次元の活動空間を設計して、シェルターという堅苦しい印象を取り除いている。

アを派遣して、飼い主の家を訪問する。問題がないことを確認した後、百五十ユーロの飼育費を支払う。シェルター側は飼い主が動物の医療費を負担できることを確認する必要があるため、訪問前の書面審査段階では、「給与」も考慮される。マリアによると、「シェルターは職業のない人や一部屋に住んでいる人、長時間労働の人には犬を飼育させません」。しかし、このような理想的な飼い主の選択は、シェルターの犬の数が少なく、人々がこれらの規定の基準を高いと思わない状況下で初めてできるのである。

アメリカも野良犬がいけない国であるが、ドイツと異なる点は、収容所では





二〇一八年にロサンゼルスを訪問した際、公立でも民間のシェルターでも相当オープンな態度で、潜在的な里親に接していることに気がついた。「彼らはシェルターがペットショップと競争すべきだと言います。飼いたいと思う人がいても、基準が高すぎるためにショップから買う可能性があるからだと思います。そのような理由で人を逃すことなく、いい飼い主になるよう教育できればと思っています。そうです」。動物保護管理科の責任者である林明瑜（リン・ミンユ）氏によると、高い基準を設定しないことは即ち飼い主を選択しない、ということではない。その代わりに、一般の人と話している中で、

飼育の仕方を提案し、飼い主が将来問題に遭った時、シェルターに戻って助言を求めるような、ポジティブな循環を形成したいと思っている。

さらに、米国のシェルターは里親の経済状況を審査しない代わりに、民間の支持で裕福でない飼い主を支援するようにしている。例えば、動物保護団体が設置した移動式医療車両は、無料で簡単な治療を受けられる。「シェルター内の動物は常に入れ替わるため、容易に引き取ってもらえます。飼い主が困難に陥った時もシェルターに戻ることができ、州と州の間で互いに収容している動物を調節しています」。林氏によると、この方法が

良いかどうかを判断することはできないが、アメリカのアイデアは台湾の参考に値するものであると信じている。彼らは益々多くの人が猫や犬を家族の一員として受け入れ、人々が動物を選ぶのではなく、参加することを厭わなくなることを見込んでいます。そうしてこそ、社会全体がペットフレンドリーになるのである。

二〇一三年にドキュメンタリー映画「十二夜」がリリースされ、台湾社会に衝撃を与えた。以前、公衆の関心事にならなかった放浪動物のシェルター問題が関心を集め、議論され始めた。台中市動

●TNR協会は野良猫と野良犬に対して、去勢手術の概念を積極的に推進している。

物保護所の秘書である姜淑芳（ジアン・シューファン）さんによると、「それ以前は、シェルターに動物を連れて来た人の殆どは安楽死制度を理解しておらず、『少なくとも道端に捨てるのではなく、ここに連れてくるだけで十分だ』と考えていたのです」。安心できる飼育放棄だと自分だけ納得し、その責任を多過ぎる動物で負担が重いシェルター側に押し付け、彼らを死刑執行人と呼んでいたが、今はそういう非難は大分少なくなっている。二〇一七年、台湾はシェルターでのゼロ殺害政策を実施し、健康な動物を安楽死させることはなくなった。放浪動物

の数が減少せず、飼い主の質が向上していない状況下では、多くの人々は依然として簡単に動物を飼育したり、放棄したりしている。しかし、姜さんは、政策の実施後に派生的に出てきた策略が民衆の責任教育に役立ち、飼い主に放棄する前に冷静に考える期間を与え、シェルターと彼らがコミュニケーションを取る機会を増やしていると考えている。

しかし、台湾では今だに大量に飼育放棄が起こっているという問題から見ると、多くの民衆の心理はまだ政策に迫っていない。マリアによれば、ドイツで犬を飼うことは新しい家族の一員を迎

え入れることなのだが、台湾にはまだそのような社会的雰囲気にかけている。殆どの人はまだ「ペット」を飼っているのだ。敦さんは、多くの人は猫や犬に食べ残しを与えて、病気は治療する必要がない、という時代を経てきており、高まつてきている動物保護の意識に追いついておらず、飼い主の責任に対する理解も世代間のギャップがある、と言った。姜さんによると、現在、里親になるにしても購入するにしても、猫や犬は「商品」という雰囲気はまだ強く、見た目を選ぶことは避けられないが、多くの人はその生命と十年以上付き添うことになるという認識に欠け

ており、動物と彼らの個性と人生計画における適合性をあまり考慮していない。

### 動物シェルターを 「教育センター」に戻す

このような状況下でどのようなにして、飼い主として適切でない人に飼育する前に放棄させ、適切な飼い主に諦める前に再考させて、資格のある飼い主になる方向に進めるかが、台中市動物保護所が努力している目標となっている。そして、少しずつコミュニケーションを通して、シェルターがその機能を発揮し、本当に





●新北市新店区では、地元ボランティアが仮設の猫小屋を設置し、野良猫にシエルターと食べ物を提供している（右）。

問題を抱えている飼い主にサーブिसを提供して、様々な動物の問題を解決し、これ以上、収容するだけの場所でなくなることを期待している。

さらにこの段階で、教育を通じて飼育放棄を減らすには限度があるが、民間と当局の双方が努力の成果は現れるはずだと認めている。二十歳未満の人はペットの里親にはなれなくても、小さい頃から責任という観念を持つようになれば、将来的に飼育放棄を減らす準備を行なってい

ることに他ならない。高雄市動物保護所は、二〇一三年から頻繁に学校に行って宣伝活動を行ってきた。近年、設備が整った後、民衆がシエルターに来ることを期待している。里親やボランティアにならなくても、見に来るだけでもいい。要は同情心でシエルターの動物を見て欲しくないのである。

高雄市の「動物保護ケアパーク」は、昨年十一月に環境保護署から認定され、「動物シエルター」をテーマにした台湾初の環境教育施設となった。「環境教育法」の規定により、小学校から高校までの教師と生徒は全員、毎年四時間以上の環境

教育に参加する必要がある。従って、ここが環境教育施設として認定されたということは、学校からシエルターを訪問する意欲が大幅に高まるのである。動物保護チームの技術者である鄭莉佳（ジョン・リージア）さんによると、多くの学校から、子供たちをシエルターに行かせるつもりはないと率直に言われたことがある。また、猫や犬を愛する人たちは、動物の眼差しに耐えられなくなることを恐れて、シエルターに行くことができない、とよく言う。一般大衆の印象では、「動物保護活動をする」ことは少し神経質的で、悲しみと道徳的な圧力を背負う。動物保



●台湾犬がイギリスの里親にもられ、ティリーの家族の一員となった。「動物の家」を通して、動物の放浪をなくし、「購入する代わりに里親になる」という概念を実践している。

護の概念を広めたのであれば、そのような考えを取り除く必要がある。以前、訪問者を直接、犬の区域に入らせるという「常軌を脱した」方法を試してみたことがあるが、確かに効果はそれほどではなかった。

「皆がプレッシャーを感じることなく、定期的にシェルターに来て感情の交流を培うだけ、というのは可能なのだろうか？」このコンセプトから、高雄市動物保護所は方針を変更し、学校からの参観日

程をゲームとコースだけに絞った。そこでは一、二匹犬が教室で生徒と交流するだけである。その他、昨年末に、彼らは一泊二日の「犬の音楽祭」を開催し、音楽パフォーマンス、文化アイデアマーケット、夜間キャンプなどの活動を行った。台湾の動物シェルターはこんなにも活力があることを人々に示した。鄭氏によれば、面白いコースと不定期なオープンアクティビティを通じて、親子や大学生などにシェルターに来てもらい、また来たいと思ってもらうことを期待している。この変革は教育だけでなく、「潜在的忠実な飼い主」をも増やしているのである。多くの「動物保護先進国」は長いプロ

セスを経て、やっと今のように民衆が容易に飼育を放棄しないという目標に行き着いたのである。台湾の人は長い間、犬や猫を飼ってきているが、社会と法律の面から飼い主の責任を強く求め始めたのはこの十年で、世代交代の経験はない。役所も一般市民も適応することを学び、観念を変えようと試みている。諸々の理不尽な飼育放棄を短期間になくすることはできず、シェルターは悲しみから抜け出すことができないにしても、教育と社会の流れによる影響で、台湾があるような理想に到達できないことはないはずである。(経典雑誌二六三期より二〇二〇年に翻訳)



## 難関を乗り越えて

「辛い」と言わず、「感謝」の気持ちを持ちましょう。障害に遭遇したなら、事を成し遂げる決意を新たにし、難関が乗り越えられた時は、恩人の支援に感謝することです。

◎文・釋徳仇／訳・済運

どんなに苦勞しても喜んで受ける

九月十七日、大愛テレビ局の管理職と職員が上人に会見した時、「今の女性は仕事もして家事も子供の面倒も見なければならず、大変な苦勞があります。しかし、それも自分の人生における選択でありました。」

り、家庭に尽くし、自分の意志や理想のために努力するのは、どんなに大変でも喜んで受け入れることができるはずですよ」と上人が言いました。

「世界には生まれた時から苦難が多く、資源の乏しい環境にいる人がたくさんいます。局の職員たちが取材で外国に行くといつも、幼い子供が住む家もなく、衣食に不足しながら貧しい生活をしているのを目にします。彼らは将来の人生を選択することができず、学校に行って勉強するのは贅沢なことなのです。しかし、ここにいる管理職や職員の皆さんは平穏な生活の中で育ち、義務教育を受けて高等教育に進み、好きな学部に入って人生に対する考えを持ち、したい仕事を選んでいらっしゃる方々ですから、どんな苦勞も喜んで受け入れるでしょう。同じメディアの仕事でも、大愛テレビでの仕事は他の民営テレビ局よりも得るものが多いと思います。仕事は大変かもしれませんが、



せんが、心に決めているのであれば、苦労も幸福に感じるはずです」。

「この世で正しい事をする時、どれも簡単なものではありません。自分の選択が正しいければ、自ずと正しい事を成し遂げようと決意し、他人よりも努力して重責を担おうとしますが、苦労も多いのです。しかし、私が慈済を創設して五十五年間、一度も「辛い」と言ったことはなく、いつも『感謝』の気持ちを持ち続けています。それでも常に障害に遭遇しますが、それは事を成し遂げられるよう、私の決意を強くさせてくれるだけです。一つ一つ難関を乗り越えたあとには、感謝の気持ちが増えます。それは恩人の助けで、難関を乗り越えたことへの感謝です」。

上人は管理職と職員と互いに励まし合いました。「大変な時代では大きな是非を見分ける必要があります。それは私たちが、他の人ができない大きな仕事をやらなければならないからです。それが私たに越えられなければ、目標を到達したことによる人々の賞賛は聞こえて来ません。自分だけがよいと思うのではなく、難関を突破し、人々が体得して心から賞賛してこそ、事を成就したと言えるのです」。

「私はいつも自分に言い聞かせています。もし、人を利することのない日が一日でもあれば、その一日は価値のない人生なのです。私の人生は時時刻刻と人を利してこそ、価値があると思っています」。上人は自分の人生を振り返ってこう言いました。幼い時から成長するまで、即ち、家にいた時から出家するまでの人生で過ちを犯したことがないことに喜びを感じています。人生で不足なところがないだけでなく、両親の産みと養育の恩に報い、親が授けてくれた体で

大衆に奉仕しています。また、「仏教の為、衆生の為」と宗教に対して努力して、生命と慧命に結果を出しており、無駄に今生を過ごしてはいません。

「私の人生は感謝することが多いのですが、最も感謝したいのが慈濟人です。もし、慈濟人がいなかったら、慈濟はなかったでしょう。慈濟の創設は私の一念から始まったものですが、一かたまりの人が私について、困難な中で慈善を展開し、「克勤、克儉、克難」の中で功徳を達成させました。慈濟は一日に五十銭を貯金することから始めましたが、五十五年後の今は毎日、世界の情報に触れることができます。というのは、慈濟人が世界に在住しており、大愛テレビが大衆の目と耳になり、私たちに天下の出来事を知らせてくれているからです」。

上人が大愛テレビの職員一人ひとりに感謝するのは、皆が真に発心立願した菩薩であるからです。同じ一つの志の下に、正しい報道をして、質の高いニュースや他の番組を制作しています。そして、報道されるニュースは全て人を利するものであり、広い視野を持っています。それは、眼前の利益だけを重視し、消費や旅行ばかりを推奨することで一時的な経済効果だけをあげようとして逆に長期にわたって環境に害をもたらすような報道ではありません。

「社会の風潮がそうであっても、私たちは蛍のように淡い光を放つだけでも、正しい報道をして、人心を浄化し続けるのです。真つ暗闇の中にたとえ一匹の蛍しかいなくても、その光は目に見ることができません。人文志業のスタッフが、この清流を世界に駆け巡らせるよう、しっかりと続けていくことを願っています。あなたたちは人文志業の一代目で、清流を作る源であり、その責務を担わなければなりません」。(慈濟月刊六四八期より二〇二〇年に翻訳)

# 十二月の出来事

訳・済運

	12・01
<p>◎慈済基金会は1日に宜蘭県政府と、22日に台中市政府と慈善に関する協力体制の覚書を交わした。その内容は慈善ケアと防災教育、生態系における環境保全、公益人文面での協力である。</p> <p>◎慈済基金会は「拍手する手で環境保全を！ゴミの分別」と題した国民公益活動において、第5回江蘇慈善賞の「最も影響力のある慈善プロジェクト賞」を獲得した。プロジェクトの責任者である洪維さんが代表で賞を受領した。</p> <p>◎慈済基金会は中国慈善連合会災害救助委員会の委員として招聘された。任期は3年である。</p>	<p>3日から6日まで、慈済大学模擬医学センターで模擬手術の授業が行われた。3日に6人の「無言の良師」の起用式を行い、19人の</p>

	12・05	12・06
<p>医学生と17人の慈済病院の医師が学習に参加した。そして、7日に送別式、追悼感謝会、入龕式典が行われた。</p>	<p>慈済基金会の第4回「Fun大きな視野で未来に向かおう！青年公益実践プロジェクト」で、33チームが決勝に進み、5日、新店静思堂で最終選考会と青年公益に関する交流会が開かれた。そして、12日と13日に台北華山1914文化イノベーション産業パークで入選チームが発表され、「第3回青年公益実践プロジェクト成果発表会」が行われた。また、シリーズの座談会では、ソーシャルイノベーション領域で結果を出した青年たちを招いて体験を分かち合った。</p>	<p>慈済基金会は「5% Design Action 社会設計プラットフォーム」と共同で、「大声でエコを呼びかけよう！リサイクルステーションの</p>



12・10	12・09	<p>果を発表した。2000人近いフィリピンの医師が参加した。</p> <p>◎慈済基金会は2月に続いて嘉義県政府と、災害支援での協力体制を強化する契約を交わした。8日、当県消防署と防災避難掲示板寄贈の協力に関する覚書を交わした。当県の全18町村の54カ所に防災避難掲示板を設置する工事を2021年に始める。</p> <p>10月、ベトナム中部は台風15号と18号などに立て続けに襲われ、洪水被害を出した。慈済ボランティアは11月に視察し、12月9日から13日までハチン省とクワンビン省で9900世帯に見舞金を配付した。</p> <p>11月半ば、台風22号がフィリピンのルソン島を襲い、グレートマニラ地区で水害が発生し、慈済フィリピン支部は支援活動を展開</p>
-------	-------	--

12・08	12・07	<p>斬新な設計と実践」活動を始めた。環境に優しいテーマに興味のある設計領域の人を招いて、6日と2021年1月9日に共同で工房を作り、慈済リサイクルステーションの優れた設計案を提出して、2021年1月30日に設計理念の発表会を行い、成果と考え方を交流する。</p> <p>インドネシア大学は環境に優しい世界大学ランキング（UI Green Metric）を主催し、慈済大学は世界で124位、台湾で12位にランクされた。</p> <p>◎花蓮慈済病院はフィリピン・カードイナル・サントスメディカルセンターと共同で、「台湾フィリピン新型コロナウイルス肺炎漢方医学オンラインフォーラム」を開き、漢方医学の新型肺炎における成</p>
-------	-------	--

12・22	<p>師を招いて、「初心に返る」をテーマに、社会的に弱い立場の人へのケアや環境保全などの社会問題に関心をもち、実際に改善方法を探し出すという体験を分かち合った</p> <p>◎慈済基金会は中国江蘇省婦女兒童福利基金会と協力して、「大愛で手と手を取り合う阜寧県・生活保護世帯の子どもを健康的に成長させるプロジェクト」を始めた。18日、阜寧県益林鎮益北小学校で開始宣言と学費補助式典が行われ、1520人の貧困家庭の学童を支援した。また、学童に読書の習慣を身につけてもらう目的で、「世代に渡って読書する流れを作る」活動を始めた。</p> <p>慈済基金会と行政院農業委員会水土保持局は協力体制の覚書を交わした。「防災」、「環境保全」、「地域ボランティア」を軸に、共同で地域の自主防災及び資源の共有などを進める。</p>
-------	--

12・12	<p>した。11月中にマリキナ市とリザル州サンマテオで被災者雇用による環境清掃活動を行なった後、12月10日と11日に3万8千世帯に見舞金を配付した。また、13日まで世界21の国と地域でフィリピンの台風被災者を支援する愛の募金活動を行った。</p> <p>慈済基金会はレバノン・フォートワ・イスラム協会と共同で、今回初めてジャナ地区サンシモンビーチの貧困住民を支援し、12日と13日に450世帯に物資の配付を行った。今回の活動にはトルコの慈済ボランティア3人が国境を越えて参加した。</p>
12・18	<p>◎大愛テレビ局は「熱血若者 Keep Going！第3回交流展」を主催した。18日から20日まで華山1914文化イノベーション産業パークで行われ、社会環境に対して理想を持った8組の青年と4人の講</p>

# 各国の連絡所

## 本部

971 花蓮県新城郷康樂  
村精舎街 88 巷 1 号  
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966  
志業センター (静思堂)  
970 花蓮市中央路三段 703 号  
TEL: 886-40510777 # 4002  
0912-412-600 # 4002

## 花蓮慈済医学センター

970 花蓮市中央路三段 707 号  
TEL: 886-3-8561825  
玉里慈済病院  
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号  
TEL: 886-3-8882718  
関山慈済病院  
956 台東県関山镇和平路 125-5 号  
TEL: 886-89-814880  
大林慈済病院  
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号  
TEL: 886-5-2648000  
台北慈済病院  
231 新北市新店区建国路 289 号  
TEL: 886-2-66289779  
台中慈済病院  
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号  
TEL: 886-4-36060666  
大林慈済病院  
640 雲林県斗六市雲林路 2 段 2 4 8 号  
TEL: 886-5-5372000

## 慈済大学

970 花蓮市中央路三段 701 号  
TEL: 886-3-8565301

## 台北支部 (新店静思堂)

231 新北市新店区建国路 279 号  
TEL: 886-2-22187770  
慈済人文志業センター  
112 台北市立德路 2 号  
大愛テレビ局  
TEL: 886-2-28989999  
静思人文  
TEL: 886-2-28989888

## アメリカ

総支部 (San Dimas)  
TEL: 1-909-4477799  
北カリフォルニア支部  
TEL: 1-408-4576969  
ニューヨーク支部  
(New York)  
TEL: 1-718-8880866

## カナダ

TEL: 1-604-2667699

## メキシコ Mexicali

TEL: 1-760-7688998

## ドミニカ Santo Domingo

TEL: 1-809-5300972

## ブラジル Sao Paulo

TEL: 55-11-55394091

## イギリス London

TEL: 44-20-88699864

## フランス Paris

TEL: 33-1-45860312

## ドイツ Hamburg

TEL: 49 (40) 388439

## オランダ Amsterdam

TEL: 31-629-577511

## スウェーデン Goteborg

TEL: 46-31-227883

## オーストリア Vienna

TEL: 43-1-7346988

## 南アフリカ Gauteng

TEL: 27-11-4503365

## 中国蘇州

TEL: 86-512-80990980

## 香港

TEL: 852-28937166

## フィリピン Manila

TEL: 63-2-7320001

## タイ Bangkok

TEL: 66-2-3281161-3

## ベトナム Hochiminh

TEL: 84-8-38535001

## ミャンマー Yangon

TEL: 95-1-541494

## マレーシア

Penang

TEL: 604-2281013

Malaka

TEL: 606-2810818

## シンガポール

TEL: 65-65829958

## インドネシア Jakarta

TEL: 62-21-5055999

大愛テレビ局

TEL: 62-21-50558889

## スリランカ Hambantota

TEL: 94 (0) 472256422

## ヨルダン Amman

TEL: 962-6-5817305

## トルコ Istanbul

TEL: 90-212-4225802

## オーストラリア Sydney

TEL: 61-2-98747666

## ニュージーランド

Auckland

TEL: 64-9-2716976

# 慈済

2021年1月20日発行・289号  
中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄  
Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈済基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路2号

編集 慈済日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@daaitv.com

慈済基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いです。(日文組編集同人)





## 台風一過 協力し合う復旧

11月、超大型台風19号（コーニー）と中型台風22号（ヴァムコー）が相次いでフィリピンを襲った。ルソン島中部を直撃した19号は、北西太平洋では2013年以来の超大型台風だった。4度もフィリピンに上陸し、大きな土砂災害と水害をもたらし、40万人が避難を迫られた。

深刻なコロナ禍の中、マニラの慈済ボランティアは飛行機に乗って、深刻な被害を受けたアルバイ州に赴き、被災地を視察した。タバコ市、カミリグ郡で速やかに被災者雇用による復旧作業が始まると、被災住民は町の清掃に出発する前に平穏無事であるよう祈り、世界中からの愛の支援に感謝した。ボランティアは11月下旬に、1万8千8百世帯余りに緊急見舞金を届けた。（撮影・黄亮亮 フィリピンアルバイ州タバコ市 2020.11.8）



慈済日本サイト 慈済ものがたり